議会レポート

発行者　鈴鹿市議会議員 石田秀三
鈴鹿市伊船町2751　電話 371-0423
FAX 371-2469

2007.6.28　№１４６

非正規の先生が2割も

学校の下支え・非常勤講師の待遇は

今年から鈴鹿市教委は「少人数学級」を全小中学校ですすめるために、市費での非常勤講師を多く採用しました。今学校には、正規の教員と、１年ごとの常勤講師、時間給の非常勤講師という３種類の先生がいて、やっと学校運営がまわっている状態です。下の表のように、管理職をのぞく教員1025人のうち205人で20%、５人に１人が非正規の先生となっています。

私は６月議会の11日本会議一般質問で、とくに急増した非常勤講師の待遇の現状と、改善について質問しました。非常勤講師の時間給は2550円～2790円と、一見よくみえますが、勤務が週９～16時間に限定されていて、また夏休みなどは無給なので、最高でも年収200万円に届きません。社会保険にも加入できず、高い国保税負担などがあり、独立した生活はとても保証されません。また、打ち合わせや準備の時間は、時給が授業の半額になるという理不尽な格差もあります。

正規教員の大幅増員が見込めない中、当分は非正規の先生が多くいる状態は続きます。私は、先生たちが意欲をもって仕事ができるための待遇改善を求めました。教育長は「市費の講師は県費講師の待遇に合わせている。県に改善を働きかける」と答えました。

鈴鹿市の小中学校教員の職種別人員（H19.5.1現在）

	管理職	教　諭	常勤講師	県非常勤	市非常勤	合　計
小学校	６２	５４５	３６	３０	５２	７２５
中学校	２２	２７５	４１	２０	２６	３８４
合　計	８４	８２０	７７	５０	７８	１１０９

薬学部新設に９億円は、多すぎる？

鈴鹿医療科学大学の薬学部新設に、市の補助金として３億円を３年、合計９億円も出すことの是非について、６月議会では疑問や慎重論が続出しました。私も一般質問の中で、「医科大には、かつて誘致の時に（平成３年開校）建設補助金13億円、用地費20億円、合計33億円も出している。今回はその上に９億円となり、市民の理解は得られない。また、改選されたばかりの議会にすぐ賛成せよというのも性急である」と主張しました。最終日の討論で森川議員が、「設置事業費の２割は多すぎる。出すにしても県と同等の１割を上限にすべき。」と、議案に反対を表明しました。

説明不足のまま決定、市民の理解は得られない

総務委員会の議論、最終日の各会派の討論のなかでも、９億円の説明が十分されていないとの指摘が多くされ、最後の採決は賛成多数でしたが、問題を残した決定となりました。

先日、鈴鹿市出身で他市で薬剤師をしている方から、こんなメールをいただきました。「薬学部に９億円とは驚きました。鈴鹿市民にどんなメリットがあるのかと思いました。・・薬学部が全国に乱立したため、この４月定員割れが起きています。考えられなかったことです。・・この９億円を医療・福祉に回せば、どれだけの市民が救われることでしょう。」

副市長を２人に、１人は国交省から

川岸市長は６月議会に、副市長（助役という名称を改めた）を１人から２人にし、ひとりを前収入役の松原俊夫氏（63才）、もうひとりは国土交通省の職員から角南(すみなみ)勇二氏（52才）とする提案をしました。

鈴鹿市は７年前まで13年間、助役２人制をとり、技術担当の助役４代のうち３人は旧建設省役人の出向が続いていました。平成12年に「行財政改革」を理由として１人に減らして、現在に至っています。

今回の２人制復活について川岸市長は、三役のひとりである収入役が無くなったこと、鈴鹿市の遅れている道路行政をすすめる必要性、また内を治める仕事と外向きの仕事との分担をする必要性、などを理由としました。市長が言うような効果については、今後の両副市長の仕事ぶり次第です。

長崎で被爆した悲痛な体験を聞く

６月24日、鈴鹿原水協の主催で「核兵器のない世界へ」の学習会が開かれ、磯山に在住する井手勝子さんの「二度と地獄は見たくない」というお話を聞きました。

井出さんは長崎市で女学生のとき、軍の工場に動員されていて、原爆投下時は寮に帰って横になっていたところでした。気がつくと周りは真っ暗、家の下敷きになっていました。何とか外に出ると、建物も何もない。あちこちから「助けてー」の悲鳴、夜になると長崎中が火の海でした。

体験を話す井手勝子さん

体中にガラス片が刺さって

病院でも手当も受けられず、キズだらけの体で家にたどり着くと、母親が驚いて玄関で座り込んだそうです。２ヶ月かかってキズが治っても、外に出られませんでした。被爆者は「病気がうつる」と差別され、結婚も出来ない、死のうと考えたそうです。

原爆を知らない復員兵と結婚、「奇形児が生まれたら」と産むのが怖かったが、幸い元気な子でした。でも被爆のことは10年間、夫には隠して、娘にも高校まで言えなかった、被爆手帳も20年間使わなかったそうです。

そんな井手さんが、三重県に来て被爆者の会の会長さんに説得されて、学校などで被爆体験を話すようになりました。「あと１週間、終戦が早かったら、私はこんな目にあわなかった。とにかく戦争はダメ、勝っても負けても犠牲者がでます。」

体中にガラス片が刺さっていて、最近、目の横にあったのを病院で取ってもらったという「実物」を見せてもらいました。60年たっても、戦争と原爆の犠牲者の苦しみはまだ続いているのです。

今年も原爆パネル展を行ないます

８月７日～９日　　市立図書館ロビーにて

どうぞお立ち寄りください。　　**主催・鈴鹿原水協**

ずいそう

日本語はおもしろい

日本語研究者の金田一秀穂氏が、教育テレビ（月曜夜）で「日本語のカタチとココロ」とのテーマで講義をしている。日本人が毎日、なんとなく使っている日本語だが、これを研究者からみると、とても不思議でおもしろい言葉だと、金田一先生は解説する。

日本語の「音」は、母音と子音を組み合わせた101音しかなく、他の言語に比べて各段に音を文字にしやすいのが特徴である。その「音」に、中国から入ってきた漢字を当てはめ、ひらがな、カタカナを混ぜて表現することで、読み書きがひじょうに便利になっている。ワールドカップを「W杯」、オリンピックを「五輪」、アメリカを「米国」、タバコを「煙草」など、外来語にも融通をきかせることができる。

何気なく使っている言葉にも、違いがある

「学校へ行く」と「学校に行く」は、どう違うか？「学校へ」は学校という建物へ行く、「学校に」は勉強をしに行く、の違いである。「私は石田です」と「私が石田です」は、どう違うか？「私は」は「私は誰なのか」の答えで、「私が」は「誰が石田なのか」の答えである。というように、日常使い分けている言葉も、よく考えるとむずかしい。

お金に関する言葉も、「費・代・料・金・料金・賃」などがあり、「給食」なら「費」、「タクシー」なら「代」、「水道」なら「料」と使っている。人を表わす言葉も、「手（運転手）・士（税理士）・員（会社員）・人（職人）・師（医師）・者（役者）・家（政治家）」と使い分けている。では同じ「人」でも、「にん」と「じん」に変わるのはなぜか？「にん」は一時的なものを示し、「病人」はいつか治るから「にん」。対する「じん」は一生つづくものを示し、「日本人」は「じん」と読む。どうも改めて「なぜか」と聞かれるとよく分からないが、うまく使ってはいるのである。

このように日本語の使い方をたまには見直すことも、大事ではないか。最近も「改革」という言葉に日本中がコロッとだまされたばかりだし、いまも「美しい日本」「戦後レジームの打破」などという文句で人をだまそうとするタカ派政治家が、この国を牛耳っているのだから。